

一心寺かわら版

第三号 平成十七年一月発行

新年のご挨拶を申し上げるとともに、昨年の地震台風によって被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。本年が良い年となる様、ともに歩んでまいりましょう。 合掌

「耕せ 耕せ 心を耕せ」(徳正唯生師)

本年の仏教青年会柱掛け法語のことばです。これは広島県の真宗僧侶、徳正唯生師によるものですが、次のような背景があります。

広島県のある集落に真宗寺院がありました。その寺は住職が不在のため隣寺がお世話をし、近隣の方々が毎日お仏飯を供え、お勤めを続けておられました。そのお寺の近所に、ある女性が嫁いでくることになりました。その女性がこの地に嫁いでくるにあたって、母親は

「あんたが今度嫁がせてもらう家はお寺のすぐそばじゃけえ、わしやあ非常に喜んどの。そんだけお寺に近いんじゃけえ、あんたあお寺でござ座がある時にや必ずお参りさしてもらいんさい。じやけんど向こうの家の人がお寺参りを嫌うようじゃったら、家んなに波風立てんようにおとなしゅうしとれ。おそらくそれだけ寺に近い家じゃけえ、お寺の周辺のどっかにその家の畑か田んぼがあるに違いないけえ、そこで野良仕事をさせてもらいんさい。そ

うすりや声の大きいご講師なら本堂から声が漏れて聞こえてくるけえ、そんな時や畑を耕し耕し聴聞させてもらうんで」

とおっしゃったそうです。幸い嫁ぎ先も率先してお寺参りする家庭で、一緒におまいりする様になったそうですが、この母のことばによって今まで導かれてきたと、思い出すたびにありがたく、嬉しくなるそうです。

(田んぼアート・山形県白鷹町)

この法語について友人と話をしていると、「心を耕せというたら自力ちがう？浄土真宗は他力の教えやろ？」と言われました。田んぼは耕さずに放っておくと土がやせてしまつて固くなり、いずれ作物を作ろうとしてもいいものはできないそうです。それと同じで私たちの心も耕していなければ堅く閉ざされてしまいます。どのようなにして耕すのかといえは仏法聴聞です。自力ではなく仏さまのことば、親鸞聖人のことばによって私の心が耕されていくのです。

当時、お釈迦さまは「バガヴァット」とも呼ばれたそうですが、これは「幸あるもの」という意味があります。また『阿弥陀経』の経名である現地のことばを直訳すると「幸あるところの美しい光景と名づける経」という意味があると言いますから、仏教はし



あわせになる道を説いているといえるのではないのでしょうか。その『阿弥陀経』には、浄土は目に見えるものすべてが美しい世界であると説かれています。では私の振る舞いは見られて恥ずかしいものではないのでしょうか。また浄土は聞くものすべて美しい音色、音の世界だといいますが、私のことばは人を傷つけず喜ばせる美しいものでしょうか。浄土はそういう美しい世界であって、みなともに一つのところで出会える「俱依一処」の世界です。その慈悲に満ちた境地に生まれ往く道を歩ませていただくことがしあわせだということです。

真宗興正派は今、興隆正法運動「やっぱり阿弥陀さん」として三つのスローガンを立てていますが、その一つが「柔らかな心でお互いが認め合える幸せを伝えましょう」です。人間はお互いの存在が認め合えた中にこそ、しあわせを感じられるのではないのでしょうか。昨今の事件を見ていますと、お互いが認め合えず悲惨な現実を引き起こしている様に思います。阿弥陀仏の浄土の光を受けて、いつでもどこでも手が合わさり、頭が下がり、認め合える、合掌・念仏・礼拝の生活の中にこそ本当のしあわせがあると伝えて下さっているのがお釈迦さまであり、親鸞聖人なのです。

先程の話しに出てきた女性は、阿弥陀仏のお導きによって心が柔らかくなっていく生活の中に本当のしあわせがあると気付いたからこそ、心を耕すことの大切さを教えてくれた母親のことばが人生の財産となっているでしょう。私たちもそうありたいものです。

真宗仏事について③

⑥ お仏飯

お仏飯はご本尊である阿弥陀仏の尊前に、また親鸞聖人の絵像などに供えることになっています。ご本尊へのお供えは、浄土のすべての仏さまへのお供えともなります。朝お供えして昼に下げるのが正しい作法ですが、これはお釈迦さまの時代の仏教徒は午前中のみ食事をし、午後は食事をする時ではないとされていたことによります。しかし、法事などには一日中お供えしておくこともあります。ご飯を炊けば真つ先にお仏飯としてお供えし、下げた後はありがたくいただきますしよ。

⑦ お供物

「山・海・里」のものをお供えします。例えば「山」のものとしては果物など、「海」のものとしては昆布・海苔など、「里」のものとして餅・菓子などをお供えします。その中でも餅が最高のお供えとされています。供筒（くげ）などにのせてお供えするわけですが、普通は対にして供えます。お供えというのは、心情的には仏さまに食べていただくようにお供えするわけですが、それぞれ私たちが生きていくのに必要な食物の一つです。そうしたいのちの恵みを、仏さまからのいただきますものとして感謝しましょう。

⑧ 過去帳・くりだし

浄土真宗では、亡くなった方の法名を記すものとして「過去帳」を用い、位牌は用いませぬ。位牌は中国の儒家から来たもので、

霊が宿ると考えられているようです。しかし真宗門徒はみなお浄土に生まれ仏さまになられているのですから、個人の位牌を作り、そこに霊が宿っているなどは考えません。私にご縁のあった仏さまのことを忘れず、感謝するために過去帳があるのです。過去帳は日にちごとに書かれていますので、当日のところを開き、仏さまを偲びましょう。また、過去帳のかわりに「くりだし」が用いられていることがあります。これは亡くなられた月日ごとに、順番に前に出していくようになっていきます。

お経ってなあに？①

私たち仏教徒は、仏前をお灯明・お香・お花・お供えで荘厳し、「お経」をあげて仏事を勤めます。一般にいわれる「お経」は非常にたくさんあるため、「八万四千の法門」ともいわれます。この多数の仏典をその性格によって経蔵（きょうぞう）・律蔵（りつぞう）・論蔵（ろんぞう）の三蔵に分けることができます。「蔵」というのは「ピタカ」といい、「かご」の意味です。釈尊のみ教えを記したものを経（スートラ）といいます。次に、仏弟子たちが悪い行いをするたびに教団の和を保つために定めた規則が律です。最後に論とは、仏さまの直接の弟子や後の仏教者たちが、経に説かれた教えを研究して解釈した書をいいます。このように、仏教の教え全体が三蔵に収まっているわけです。

浄土真宗では経としては『無量寿経』・『観無量寿経』・『阿弥陀経』の浄土三部経、論として親鸞聖人の作られた『教行信証』（二正

信偈」が入っています）などがあげられます。



この三蔵という言葉でみなさんになじみがあるのは、「三蔵法師」（さんぞうほうし）でしょう。孫悟空がお供をしてインド（天竺）にお経を取りに行く旅の物語『西遊記』をご存知でしょう。この物語の三

蔵法師のモデルは、唐時代の初期に十七年間かけてインドへ法を求めて旅をした、玄奘（げんじょう）という僧侶です。彼の業績が偉大であり、有名であったため、三蔵法師とは彼の別名であると思われている方もいるでしょう。しかし本来、三蔵とは経・律・論という仏典の全体に通じた仏教者に対する尊称です。

たとえば、浄土三部経を見ると、『無量寿経』の康僧鎧（こうそうがい）と『阿弥陀経』の鳩摩羅什（くまらじゅう）はともに経典翻訳で名を残し三蔵法師と讃えられています。また「正信偈」には、曇鸞大師（どんらんだいし）を導いた菩提流支（ぼだいりし）を三蔵流支と呼んでいるように、たくさんの三蔵法師がいました。今私たちが読ませていただいているお経は、このような三蔵法師が伝えてくださったものであり、遠い昔の苦勞が偲ばれるとともに三蔵法師が身近な存在に思えてきます。

『季刊せいいてん』六十七号・本願寺出版社より抜粋引用